

コロナ禍における児童の黙食及びひとり食べと食に関する主観的 QOL との関連

吉田優弥¹⁾ *、吉池信男¹⁾

1) 青森県立保健大学

Key Words ①新型コロナウイルス感染症②食に関する主観的 QOL③黙食④児童⑤学校給食

I. はじめに

COVID-19 拡大による影響 (以下, コロナ禍) の一つとして, 社会生活の大幅な制限等により, それまでの日常とは異なる食生活を余儀なくされたことがある。児童生徒では, 文部科学省の通知 (学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル, 令和 3 年 11 月 22 日) により, 給食等の食事をする場面においては机を向かい合わせにせず, 大声での会話を控えるなどのひとり食べの対応が求められた。その後, 新型コロナウイルス感染症対策本部から発出された通知 (新型コロナウイルス感染症対策の基本的対処方針, 令和 4 年 11 月 25 日) では「黙食」の記述がなくなり, 文部科学省では給食の時間の過ごし方について, 適切な対策を行えば会話は可能だとする通知 (「新型コロナウイルス感染症対策の基本的対処方針」の変更等について, 令和 4 年 11 月 29 日) を発出した。さらに, 5 類感染症への移行により, 文部科学省から感染が流行している場合を除いては手洗いといった日常的な感染症対策を求めるのみとする通知 (学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル (2023.5.8~), 令和 5 年 4 月 28 日) が出された。

児童生徒の孤食 (ひとり食べ) と栄養・食生活の関連については, 多くの報告(Kusano et al., 2001)(小西, 2003)がされている。また, 児童では家族と一緒にの食事中に話をするのが食事の楽しさに関連し(衛藤ら, 2012) (西中川ら, 2018), 中学生では食卓での会話があるのが食事の楽しさに有意な関連が示されている(西中川ら, 2018)(江崎, 2017)。しかし, 学校給食における黙食と栄養・食生活との関連を調べた研究はなく, コロナ禍で生じたであろう黙食やひとり食べが QOL 等に及ぼす影響や, 2022 年 11 月以降学校給食で会話の制限等が解除されたことの影響についても報告はない。

II. 目的

コロナ禍で広がったとされる児童の黙食やひとり食べが, 食に関する主観的 QOL (以下, SDQOL) に関連しているかを明らかにする。

III. 研究方法

公立小学校 6 校の児童 162 名を対象として 2023 年 7 月に自記式質問紙調査を行い, 調査時点と 1 年前の状況を尋ねた。保護者及び児童本人から調査協力への同意が得られたのは 111 名 (男子 61 名, 女子 47 名, 答えたくない 2 名, 未回答 1 名) であった。2 時点 (コロナ禍最中と制限解除後) での変化を記述するとともに, SDQOL の高低で 2 群に分け, 給食時間の会話状況, 朝・昼・夕食のひとり食べの状況を比較した。本研究は, 青森県立保健大学の研究倫理委員会の審査・承認 (承認番号 23014) を得て実施した。

*連絡先: 〒030-8505 青森市浜館間瀬 58-1 E-mail: 2391010@ms.auhw.ac.jp

IV. 結果

2 時点の比較では、男女ともに自分からの発話 ($P<0.000/P=0.005$) 及び給食時間が楽しい ($P=0.001/P=0.033$) と思う児童が増加した。しかし、実際に給食時間中に発話をしていると回答した児童は半数以下であった。2 時点において、SDQOL の 2 群間で、喫食量 ($P<0.000/P<0.000$) や給食時間中の楽しさ ($P<0.000/P<0.000$) に差が認められた。制限解除後の時点では、SDQOL の 2 群間で給食時間中の会話意欲に差が認められ、会話状況の 2 群間では会話しながらの食事の楽しさ ($P=0.002/P=0.015$) 及び会話意欲に差が認められた。

V. 考察

1. コロナ禍の前後変化

家庭内の食事場面では児童からの発話が 8 割程度と多く、調査時点の対象小学校ではほとんどが黙食指導をしていない。このことから、学校給食の場面では依然としてコロナ禍による黙食の影響が残っており、みんなで話しながら食事をするのは楽しいと分かっているながらも会話を躊躇して黙食をしてしまう「ゆがみ」が生じていると考えられる。すなわち、制限解除後でさえ「食のゆがみ」が存在することが推察される。

2. SDQOL と各項目との関連

SDQOL によって会話の準備性の違いが観察された。この準備性の違いについて、2 群間の自発的会話の頻度の違いが考えられるが、結果から差はなかった。一方で、先行研究では SDQOL によって児童の夕食時の自発的会話頻度に違いが示されている(林ら, 2020)。このことは、食事場面の違いはあるが、コロナ禍の黙食制限によって SDQOL にかかわらず給食中に会話をしないことが根付いていると考えられる。準備性に違いはあるが、2 群間ともに話をすること、給食が楽しいと思う児童が増加したことから、準備性にかかわらず会話をしながらの給食は肯定的に捉えていることが推察される。

3. 今後の展開

本研究では COVID-19 がもたらしたコロナ禍での「食のゆがみ」について、依然として根強く存在することが結果から示唆され、新たな仮説生成につなげることができた。

会話をしながら給食を食べたいが、実際に自分から発話をする児童は少なく、依然としてコロナ禍による黙食の影響が根強く残っていた。2 時点比較では、会話すること及び給食の楽しさについて男女ともに増加を示していたことから、会話と給食の楽しさの関連性について注目できる。このことについて、児童を対象に実施された先行研究では、会話と食事の楽しさ(辻本ら, 2009)並びに給食の楽しさと健康関連因子(坂本ら, 2015)(鈴木, 2007)(村井, 2008)の関連は明らかにされているが、実際に給食時間中の会話に着目し、給食の楽しさとの関連やその他健康関連因子の変化について追った調査研究はまだない。

すなわち、今後は表出した「食のゆがみ」の課題について、特に給食時間中の会話にアプローチした健康支援プログラムの開発が望まれると考える。このことは、黙食解除後の学校給食において、児童の生涯にわたる食育の観点からより効果的な支援に繋がると考える。

VI. 発表

1. 学術雑誌へ投稿中(令和6年2月)